

ふだん私はできるだけ電車で外出しているのだが、渋谷などの副都心を通ると、精神的疲れを感じてぐったりすることがある。

私は小説家だから、常識以外のものは許せない、と考えているのではない。しかしある日、私の隣に座った男性は、もうずっと以前から流行しているわざとボロボロにしたジーンズをはいている。生地が薄くなつて、大腿部の皮膚が見えるようになっていて、荒っぽく分けて裕福と貧困とがある。そのうちの貧困は、人間的な感覚からも許せない残酷と言われている。貧困とは、食の面では今晩食べるものがない状態を指し（それ以外の不足はほんとうの貧困ではない）、衣服としては身につけているボロがいつ何時ほんとうに裂けて、使用不能になるかもしれないという状態になっていることを指す。

先進国のボロ・ファッションは、

小さな親切、 大きなお世話

作家 曾野綾子

アフリカの貧困に対する痛烈な嫌みだ。通常の人間なら他人の不幸を羨しむという残酷はしないものだが、これは他人の貧困を楽しんでいる。ほんとうに貧しい人は新品の衣服に群がる。ボロはいつ着られなくなるか分からないが、新品の服なら当分保つからだ、こんな常識も分からずボロ・ファッションに飛びつく無知な日本人が増えたのである。

女性専用車ができ、痴漢はすぐに突き出される社会的な風潮になったのは、やはり痛快なことである。しかし女性たちの方にも問題はある。最近のファッションは、衣服が本来持つ意味を多くの場合逸脱している。美的な表現の面以外に、衣服は

動物園と化した町



の約束がある。しかし最近の女性の服の中には、あのような露出的な服を着ていて、

気候の寒暖を防ぐ。日本では保温が主な目的だが、酷暑の砂漠では暑さや砂を防ぐために厚い長着を着る。しかし、最近では、この目的に大きな混乱が起きています。暑い時に無理して毛皮や襟巻きをつけたり、寒い時に太ももを露出したりする合目的でない服も許されるのは、ファッションデザイナーの作品だが、庶民は、幾分なりとも衣服が本来の目的を果たしていなければ自然に見えない。

もう一つの衣服の目的は、性的な露出を避けるということだ。人間は野性の動物と違って、普通は他者の視線の中では性行為は行わない。野獣のように性器を露出することも避ける、という暗黙

痴漢に怒るのは筋違いだと思つものがたくさんある。痴漢をしてもらうのが目的のような服を着て、痴漢に怒るのは筋違いなのである。女性の化粧は、その人のよい印象を自然のままではなく、より健康的に、より明確にするためである。しかし、この頃のお化粧の中には、元の顔が想像つかないものもある。庇のような付けまつげ、人工的なアイラインなど、お化粧を落としたりその人が判別できなくなるだろうと思ふものだ。

その上に昔の人はよく電車の中で本を読み、それが「知的人間」として動物とは大きく違う点だった。しかし、今では読書などしたことがないような顔というものがある。私は人間に会うつもりで町に出る。動物園で見えるものなのだ。しかし町でも動物の牡と牝がたくさんいると、びっくりして疲れてしまうのである。(その あやこ)